

2024年内定者アンケート

①河北新報社を知ったきっかけ

- 小学生の時に実家で朝刊を取っていて、それで知った。楽天イーグルスが好きなので当時は基本的にスポーツ記事を中心に見ていた。
- リクナビ 2025 のスカウト。オンラインのインターンシップの案内で知った。名前だけではどこの地方紙か分からなかったが、その由来もインターンで説明があった。東北のための報道をする地方紙という印象を受けた。
- 実家で河北新報を購読しており、幼いころから知っていた。小学校や中学校で河北新報を扱う授業があり、東北を中心に情報発信を行っているを知った。
- 「東北のみらいを拓く新聞論」という講義(東北大学で開講)をきっかけに、河北新報社を知った。
- 小さい頃から家庭で購読していたため、生活を支える身近な存在として以前から知っていた。
- もともと宮城県外に住んでいたが、県内に引っ越してくる前から名前を知っていた。イベントの後援、震災に関する授業などから見聞きしていたのかもしれない。

親が読んでいたという人が
多いんだね！



②志望した理由、動機

- コロナ禍を期に様々なニュースに触れる機会が増え、新聞・テレビ・ネットの記事や動画等を見た時に報道への疑問や不信感を抱き、生意気にも自分が記者になってより良い報道ができるのではないかと思い、地元で活躍していきたいという気持ちも重なって河北新報社を志望した。
- インターンシップでの模擬取材、記事執筆体験を通して、東日本大震災について何も知らなかったのだと痛感した。私の地元である大阪にも大規模な地震が来ると言われており、震災から学んだ教訓を発信していかなければならないと強く感じた。河北新報社の記者になり、震災報道に携わりたいと思い、志望した。
- インターンシップで様々な仕事を体験させていただけたのが一番の理由。一日ごとに違う部署での仕事を体験させていただき、どの仕事にも興味があった。一つの仕事を続ける

のではなく、様々な仕事に挑戦することで成長できると感じたため、志望した。

- 弱い立場の人々が直面する問題を発信したいという自分の思いを実現できることが魅力的だった。紙面を見れば分かる通り、『河北新報』には抑圧された立場にある人々の視点をしっかりと踏まえた記事が充実していると思った。震災報道に妥協しないスタンスも魅力的。能登半島地震の発生直後から現地の状況を届けるだけでなく、東日本大震災の教訓を活かすための連載を充実させ、教訓が生きたかを検証する記事を多く掲載した。自身が学び、獲得してきた能力を発揮し、情報発信や報道に携わることで東北発展に貢献したいと考えた。
- 東北各地で取材できることが魅力的だと感じたため。地元で恩返しをしたいと思った。



③入社対策で力を入れたこと

(企業研究)

- 企業研究はHPに目を通したり、新聞を読んだりするなどの基本的なことしか行っていない。
- 企業研究の一環として毎日、新聞を読んだ。河北新報社についてよく理解するためには、ホームページだけでなく、紙面の内容、特徴を知ることが大切だと思った。
- 新聞を毎日読む。私は河北、読売、毎日、朝日、日経の5紙を読んだ。知識や思考力がつくだけでなく、それぞれの新聞社の魅力が分かるようになった。河北新報社などの地方紙・ブロック紙のみを志望する場合でも全国紙を読むことを勧めたい。ローカルな問題も、マクロな観点から考えることができるようになる。
- 採用ホームページを見る、説明会で質問する。実際に新聞を読む。

(筆記試験対策)

- 筆記試験は何も対策はしておらず漢字の問題はほとんどわかっていたものが多く、英語は苦手なので難しかったがそれでも全くわからないわけではなかった。最後の時事問題は元々持っていた知識で難なく回答できた。大事なのは日ごろから様々な分野のニュースに関心を持つことであると思う。
- 日々のニュースをチェックする。字を手書きする練習をする。

(作文試験対策)

- 大学生活を振り返り、文字起こしした。些細な出来事も全部文章にした。ゼミの先生や友人にも読んでもらった。自分では作文にできないと思っていたエピソードの評判が良かったので、600字の作文に仕上げた。自分の中では些細なこと、当り前のことでも、とにかく書き出してみる、ほかの人に読んでもらうことが大切だと思う。

- 作文を書く際は、主張したいことを簡潔に伝えることを意識して書いた。400字詰め原稿用紙1枚が条件だったため、文章に肉付けをあまり加えず、文章が脱線しないようにスマートに記述した。また、書いた作文は研究室の先生に何度も添削していただき、誰が読んでも伝わる文章に仕上げた。
- 各新聞社歴代のお題を用いて週に1、2本作文を書いた。助詞の使い分けなど技術的なところは、一朝一夕で覚えられない。少しずつ勉強していくことが大事だ。
- 新聞社対策本に、全国ほぼ全ての新聞社の過去のお題が載っていた。①河北新報社の出題形式の傾向をつかんだ。②河北新報の過去問で一度書いてみた。③似ている出題形式の他社の過去問で、自分の書きたい話につなげる導入の書き方を練習した。

(面接試験対策)

- 質問と回答のリストを作成した。本番の面接では何を質問されるか分からず、鋭い質問をされることがあると思ったため、どんな質問にも対応できるように対策した。例えば、学業、部活、趣味、仕事に対する価値観に対する対策をした。また、学校の先生に面接練習をしてもらった。自分では完璧だと思っても、話し方、座る姿勢、入退室の仕方に不備がある可能性が高いため、面接に慣れることも含めて指導してもらった。
- 実践が何よりも練習になる。私は、志望度が低い企業面接も積極的に受けた。一次試験をオンラインで実施する企業が多く、あまり時間を取られずに面接の実践を積める。「迷ったら受ける」くらいがちょうど良い。塾講師アルバイトの経験が、話し下手を克服するのに役立ちました。
- 筆記試験や面接を受けるに当たって、日頃から新聞を読み、時事に関心を持つ習慣をつけた。友人や家族と新聞で知った時事問題について意見を交換する機会を持つことが、知識の定着や広い分野に対する関心を抱ききっかけにもなり、結果として役に立った。
- ESの内容を自分の中で深掘りする。河北新報で気になった記事をメモする。ニュースを見た時に、自分だったら誰にどんな取材をしたいか考える。入社したら何をやりたいか考える。短い一文で話す練習をする。



具体的で参考になるなあ
やっぱり新聞を読むのが基本なんだね

④入社を決めた理由

- メディアに入って記者になるという夢を持って就職活動をしてきた。第一志望が河北新報社だった。インターンの時に接した記者の方々や面接時にお世話になった人事部の方々がとても魅力的で「ぜひここで働きたい」と思った。他にも給与や福利厚生の実度や世間への認知度の高さなど様々ある。

- 今年の3月11～12日に宮城と岩手の被災地を訪れ、震災報道に携わりたい気持ちがより強くなった。また、インターンや面接で何度も仙台を訪れるうちに、この街への思い入れも深くなり、ここで働きたいと入社を決めた。
- インターンシップでの活動を通して、様々な仕事に携われることを実感し、自分のやりたい仕事を通して成長できると感じた。自分が生まれ育った仙台に本社があり、大好きな東北の情報を伝える河北新報社で働けることに惹かれた。社員の方々が丁寧に対応し、質問や分からないことがあった時に相談しやすい環境だと感じた。
- もともと第一志望だったので、内々定をもらった瞬間、入社を決めた。記者としてやりたいことを実現できる新聞社に採用されることを嬉しく思った。
- 自分の中で決めていた「東北に貢献する」という軸を中心に将来のキャリアを考えたときに、河北新報社で勤務することが出来れば実現可能性が高いと考えた。
- 東北各地で取材できることが魅力的だと感じた。何度か面接を受けた中で、自分の話を真摯に聞いてくれるという印象を持った。多様な角度から、時に鋭い質問もあったが、素直に自分の考えを話すことを意識した。入社してからも若手の意見に耳を傾けてくれそうだと思った。



⑤入社したらどんな仕事をしたいか

- 初心を忘れずに購読者の多数が満足するような新聞作りを目指したい。そのためには自分も努力して勉強を惜しまずに任された職務を遂行していきたいと思う。
- 震災報道はもちろん、伝統行事やお祭り、地域の街並みの変化など、地元に着した取材をしたい。大阪出身の新参者ならではの視点や気づきを記事にしたい。
- 技術職で採用されたので、紙面を作る方々が安心して作業できるようにシステム管理の仕事ができるようになりたい。紙面に載せる写真を加工して見やすくする、記事がより分かり易くなるような図や表を作成する仕事をしたい。
- 東北のイベントを盛り上げる仕事がしたい。ジュニアリーダー経験があり、人と関わるのが好きだ。県外を巻き込んだ行事、仙台のローカルな行事に携わる仕事がしたい。
- 貧困問題をはじめ、労働、ジェンダー、環境などあらゆるテーマに関心がある。視野を広く持ち、さまざまなテーマを追いたい。東日本大震災から13年経ち、震災当時とは違った問題が浮かび上がってきている。そうした問題を見逃すことなく、発信したい。
- 自身の強みを発揮してどのような業務においても活躍できる人材に成長し、河北新報社と東北に貢献する仕事に携わりたい。

- 今、日本、世界で起きていることを東北に引き寄せた記事、データ分析やデジタル媒体を生かした記事を書きたい。(教育現場で新聞を活用する)NIE に携わりたい。地域を盛り上げるイベントなども企画したい。

夢はきっとかなうピョン



⑥就活生へのメッセージ

- 一つだけ就職活動をして分かったことはいつ何時でも自分を客観視し熱意を持って臨めば、誰か1人くらいは見てくれているということ。少しでもいいので自分の夢に向かって頑張ってみてください。
- 大学3年生を振り返って、あっという間に過ぎてしまったなと思います。この1年は大切に過ごしてください。少しでも興味があるものを見つけたら、現場へ行ってみる、直接見てみる、聞いてみる。皆さんの好奇心が良いご縁につながることを祈っています。
- 就活を始める際、最初は何をしてよいか分からないことばかりだと思います。そんな時はまず、就活イベントに行ってみましょう。何も考えず、なんとなく参加する感じでいいと思います。実際行ってみると様々な企業のブースがあるので、興味のあるブースに足を運んでみましょう。すると、企業によって業務内容、待遇、勤務地などに違いがあることが分かり、自分がどの企業とマッチするのか予想できると思います。そこから企業を絞り込み、悩んだ上で就職先を決めるといいと思います。また、興味を持った企業がインターンシップや職場見学を行っているようだったら是非行ってみましょう。パンフレットだけでは分からない職場の雰囲気や実際の業務を体験できる良い機会になると思います。最初は不安だと思いますが、行動しないと何も始まらないので、「とにかく動く！」ことを意識して焦らず行動していきましょう！
- 自分が専攻している内容を仕事にすることは必ずしも必要ではないと思います。私は主に有機・金属といった材料工学を学んでいましたが、河北新報社では技術職として全く分野の違う仕事を担当します。仕事に対して不安がないわけではないですが、自分がやりたいことを優先した方が良くと思い、就職しました。就活中の皆さんも専攻内容と仕事を意識している方々が多いと思いますが、一旦自分のやりたいことだけを考えてみるのもいいと思います。応援しています。
- 社員の方々は生き生きしており、仕事にやりがいを感じているそうです。インターンに参加すれば、そのことを肌で感じられます。やりがいのある仕事をしたいという方にはぴったりの新聞社です。採用試験中、私は「ここで働きたい」という思いを誠実に伝えました。その思いがきちんと伝わり、評価されたからこそ内々定をもらえたのだと思います。小手先のテクニックに頼らず、腹を割って話す。そのためにきちんと対策をする。そうすれば自

ずと合格に近づくはずです。

- 自分の価値観やキャリアを考え、軸をしっかり定めることで後悔のない決断や行動が出来る。就活を通して実感しました。その軸を定めるに当たって、己と向き合うことを強いられた、大変な作業だったのと同時に、実りの多い期間だったと思います。将来振り返ったときに価値のある期間だったと思えるように頑張ってください。
- 就活中は長いなと思っていましたが、終わってみるとあっという間だったと感じます。いろいろな業界を見て、社会人の先輩の話を聞ける機会でした。私は一度記者を目指すのはやめようかなと思ったのですが、他業界で OB 訪問をするうちに、やっぱり自分は色々な人の話を聞くのが楽しいと思い、3 月中旬頃から記者職で受験し始めました。自分と向き合うことは時につらいことでしたが、人生を振り返る機会になりました。周りの人の話を聞いて焦ってしまうこともあると思いますが、本を読んだり、友人と遊んだり、気分転換しながら自分のペースで頑張っていただけだと思います。

みんなと一緒に働けることを
楽しみしています！

